

## 第4回ふるさとのジャズ交流際 in 斑尾 バンド講評

平成22年8月21日(土)～22日(日)

瀬川昌久

8月21日(土)

10時30分 新山実行委員長開会挨拶

各バンド40分演奏

### (1) 北沢マロ with Rhythm Orchestra (長野)

パーカショニスト北沢マロは長野在住で高橋真梨子のバンドメンバーとして活躍中。

本来の音としてのリズムを楽しむパフォーマンスを行う目的で結成したオーケストラで28名、年齢も小学1年から70歳以上に及ぶ。北沢の指揮の元、ボンゴ、コンガをはじめあらゆるアフリカの打楽器を使用。多様なリズムを「楽しい長野」をテーマに発信。ヘルメットを叩いて長野の民謡のメロディーを出したのが面白い。

リズムに多少のメロディーを添える為、マリンバなどを入れたら更に面白くなるのではないか。

とにかくこれだけの多人数で多種類の打楽器を使用するグループは他に例がなく、貴重な存在であると思うので「瀬川賞」を贈呈した。

### (2) Co-Night's (長野)

Vocal「Aki」とGuitar「Wada-hiro」のデュオ。

メンバーを増やすこともあるがこの日はギターとボーカルのデュオで「Moon river」「All of me」「Rose」「Fly me to the moon」などジャズっぽいポップスを歌う。人魚姫の「うたかけ」のような日本調の曲も披露。声の良く出るボーカルで、素直に歌ったが、ギターとボーカルのコラボレーションをもっと多様に追及すれば更に面白くなると思う。

### (3) Caliente (東京)

2007年結成。3管(tp, as, ts)にギター、ベース、ドラムス、キーボード2台という8人編成、斑尾には3回目の参加。70～80年代フュージョン、ファンク系というがメンバーの技量高く、アンサンブルとソロ両面に工夫が見られる。キーボードとギター、ベースでメロディーをとって、ウエザーリポートのようなサウンドを出したり、SO WHATでベースがメロディーを弾いたり、ボーカルも入って多彩なグループ。プロにもあまりない編成であり将来が期待される。

### (4) MISTY-Q with 田辺美輪 (東京)

P、アコースティックG、B、Dr、TS、EGにボーカルを加えた編成。

20歳の女性テナー(仙土祐希)をフィーチャーしたインストものと田辺美輪のボーカル、Speak lowやSo tired等をラテンテイストで面白く聞かせる。歌唱力高く野外にもよく響く。又若いテナーは、将来が有望。

### (5) えりーと JAZZ ORHESTRA (東京)



8月22日(日)

斑尾高原2日目も晴天に恵まれ、日射がまばゆいほどの温度の下、10時から演奏が開始され、家族連れの観客が多数芝生に横になって、ビールやスイカを楽しむ姿が見られた。

この日の出演は9グループで、内ビッグバンドは東京の2組、コンボは地元長野、新潟が3組、あとは東京勢であった。内容もバラエティーに富み、ゴスペルの大合唱、ハモニカやギター、ヴィブラフォン、 Hammondオルガン等変化に富んで面白く聞かせた。

小さな子供連れもあり、3~4歳の女の子が2人ばかりバンドステージの真下まで駆け寄ってリズムに合わせて踊るようなほほえましい風景、それに蝶々が飛び交うなど、プロのフェスティバルでは到底見られないような情緒を満喫させた。

演奏内容も、アマチュアグループとは思えない程の充実した演奏で、しかもアマチュアならでの個性的なオリジナリティあふれる演奏が多かったので、観客も楽しく満足した様子であった。出演順に各グループを紹介する。

#### (8) 都庁スイングビーツ (東京)

東京都ビッグバンド連盟所属のおなじみのベテランバンド。斑尾には初回から全回参加の熱意あるだけに、きわめて野心的でかつエンターテインングなプログラムを組んだ。この日は、4TP、5TB、4SAXの編成で、プラスが迫力ありよくスウィングした。

まずベイシーの Strike up the band でスウィングし、ネスティコの Freckle face でミディアムのサウンドを立派に表現。Body and soul で AS と TS のソロを美しく聞かせた後、ボブミンツァーの高度のスコアによる Dolphin dance の難しいアレンジを巧みにこなす。

女性ボーカルが登場して Lady is a tramp を良く出る声量とスウィング感で、TB ソロとの絡み合い等も面白く披露、Summertime に続いて原信夫が作曲した美空ひばりの「真っ赤な太陽」を英語詩でスキヤット、最後はアップテンポの Love for sale でしめた。

東京での連盟コンサートで聞いたときよりレベルが高く、よりエンターテインングな演奏であったのも斑尾の環境の故であろうか。

#### (9) JOY GOSPEL (新潟)

各地域にゴスペルグループは沢山誕生しているが、この新潟県上越市のグループはユニークなグループで面白く聞けた。オペラのソプラノ歌手である山崎弘子の指導により、20~60代の男女25名から成り、この日は17名が出演。

山崎の並外れた高く声量あるボーカルソロが、アンサンブルと絶妙に絡み合って、到底普通のグループでは出せない効果を上げている。ゴスペルの普通のスタンダードをはじめ、ヒット曲の Oh happy day !、Precious road、「天使のラブソング」主題歌から Amazing grace までをアカペラや3人のギター入り伴奏で聞かせた。山崎弘子がかねてジャズダンスの小井戸氏にダンスを習っていたそうで、ゴスペルはダンスと不可分なので、将来の発展を期待したい。

#### (10) 坂根グループ with 中村早智 (東京)

斑尾 JAZZ を事務局を務めるベース奏者 坂根格がトランペッター木谷賢一と組んだコンボで、斑尾には4回連続出演の熱心さ。本年は木谷の都合が悪く、北川匡厚が TP に入り、TS 亀岡純一、

P 毛利良平、DR 高杉朋子のクインテットで、典型的なハードバップのジャズを聞かせる本格派。TS、TP、P 等のアドリブが入ってよき時代のモダンジャズサウンドを聞かせる。

今年はこのグループに新たにボーカリストの中村早智が参加した。彼女は斑尾ジャズの司会も兼ねている熱心な支援者で、ジャズコーラスで有名な Breeze の元メンバー。最近では別のグループ「Ai (エイアイ)」というコーラストリオを組んでいる。無論ソリストとしても実力十分で、声量があるので野外フェスにはもってこいの歌手である。

彼女はこのフェスティバルの出発を祝う意味の This could be the start of something big を高らかにうたい、続いてミルトンナシュメントの英語 Bridges や It might as well be spring などの美しいメロディーを空まで届けと響かせた。

#### (11) 伊佐津和朗+Lazy Khan (長野)

伊佐津和朗は医者 of 傍らヴィブラフォンの名手としてライブ活動を続け、既に CD を数枚制作している実力者で、 Hammond オルガンの浦野伸也のトリオと共演した。

浦野は武蔵野美大ジャズ研出身、現在松本市在住で Hammond オルガンを専門に活動中。伊佐津はミルトジャクソンの曲やラッキートンプソンのブルースなどの曲を、浦野はギター of 宮嶋弘樹、ドラムの横川忍のトリオで、ファンク的なリズムを奏するなど中身の濃い凝った演奏を聞かせた。

#### (12) トライセラ・ジェット・グラフィティ (東京)

2001 年からこの名前で活動を始めたコンボ、トリオないしはカルテットを主とし、横浜や池袋のジャズフェスティバルに出演している。今回は Lee-Sarah スペシャルビッグバンドのテナー奏者を加えたクインテットで演奏した。北川昌一 (ギター) がリーダー格でピアノやギター主体の曲を演奏。Bouncing with bud をはじめ、スタンダードなジャズ曲を爽やかに披露した。

#### (13) 檜山英人カルテット (長野)

長野県佐久市在住の檜山英人 (ギター) のカルテットで、ピアノスのベースとドラムにアルトサックスの 4 人編成。伊佐津和朗が居残って共演した。非常に良くまとまったグループで、音響的にも優れたサウンドを聞かせた。専属の女性歌手 (堀内みちよ) が、Feel like making love、S' wonderful、Song for you などを歌ったが、ソウルもジャズもなかなかうまく、声も良く出た。伴奏するカルテットの演奏もツボを得て効果的だった。

#### (14) Sexy Dynamite Jazz Orchestra (東京)

メンバーの過半数が女性で、文字通りセクシーでダイナミックなサウンドを出す「魅せるバンド」だった。東京の文化服装学院の卒業生を中心に 20 年ほど前に結成された。

最近の若いメンバーが多く、男性も 5 人 (TB、TP2、DR、B) いる。イベントやコンサートなど活発に出演し、アメリカのミュージシャンとの共演も多く、女性陣の演奏能力は相当に高い。オリジナル曲もあり、貫田重雄作のベイシー調の曲を女性 5 人のサックスソロと TS ソロで聞かせる。サックス 5 人が全部女性で実力もあるのが大きな「売り」で、川村裕二朗編曲の How high the moon はサックスセクションをフィーチャーし、難しく書かれたスコアを長いソロと各人のモダンなソロで吹き上げたのが圧巻だった。タイニーカーン作の Tiny capers を 3 管のテーマではじめソロパートを TP、AS、TB、TS、B の 5 人のソロで快調にプレイする。

Alice in wonderland のサクソス陣のソロも立派だった。専属歌手高木ひろ子の声も声が良く出て「サニーサイド」と「And the engels sing」を歌った。後者の曲では歌の後有名なトランペットのソロ（原曲はツギー・エルマン、映画ベニーグッドマン物語ではハリージェイムスが吹いた）を男性のプレイヤーがそっくりに力強く吹いた。その際、彼はハリージェイムスの似顔絵を書いた面をかぶって出てきたのには驚くとともに嬉しくなった。

このような「エンターテインメント精神」こそは「斑尾 JAZZ」が出演の社会人ジャズメンに期待するところであるはずだ。

このバンドも来年是非続けてステージに立って欲しいグループである。

#### (15) 豊川雄也バンド（東京）

豊川雄也(ギター)は、既に浅草ジャズやギブソンなどのコンテストに入賞した 前途有望な 28 歳の若い奏者で、2009 年に自己のバンドを結成し北関東の「ミヤ・ジャズイン」の大トリを努めて大喝采を博した。ベースとドラムスのトリオで出演し、新しい CD アルバム収録の曲を披露した。彼のフレーズは、早いアップテンポもスローなバラードも、共に格好良く、フュージョンからジャズ、ファンクまでマスターしたプレイが魅力だ。

#### (16) Turmeric（東京）

ハーモニカをフロントに据えたカルテットで幅広いジャンルの曲を演奏する。

クロマチックハーモニカに B、DS、P が加わって、オリジナル曲の Rainy forest、Silent volcanoなどを演奏した。

このグループがラストなので、最後に豊川雄也も参加して、地元飯山がモデルの唱歌「ふるさと」を 2 人のデュエットとソロで奏し、日本語詞を書いたペーパーを沢山作成して、ステージ全員で聴衆と共に大合唱した。「うさぎ追いし」の歌詞の通り斑尾のステージには、ウサギの絵がデザインされており高原フェスティバルの終焉にふさわしいフィナーレであった。

以上